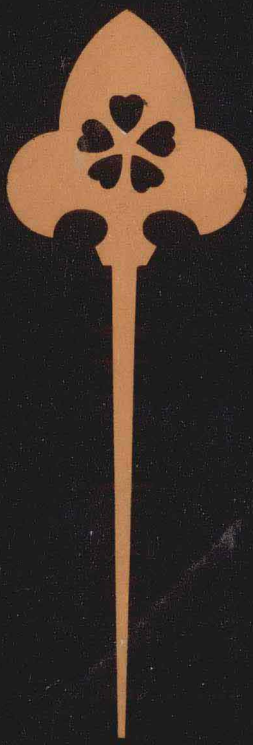
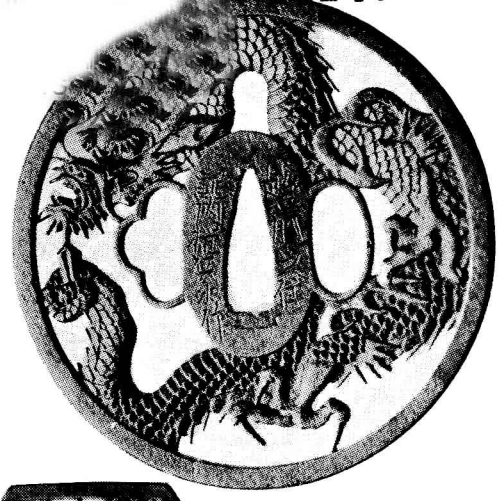
鐔

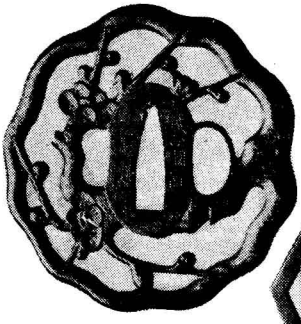
大熊喜邦著

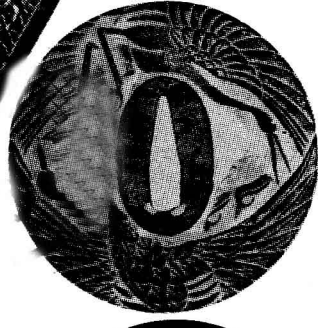


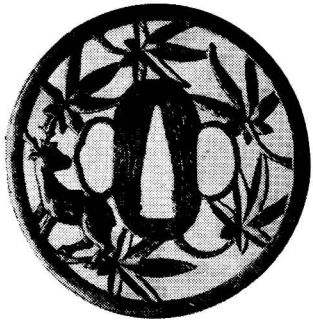
鐔

大熊喜邦 著









彰國社刊

昭和廿七年五月二十八日印刷
昭和廿七年六月　三日発行

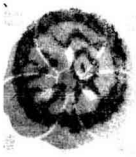
定価　三〇〇円

著者　大熊喜邦

発行者　下出源七
東京都千代田区平河町二ノ十一

印刷所　大成印刷株式会社
東京都中央区日本橋茅場町二丁目十番地

発行所　彰国社
東京都千代田区平河町二ノ十一
電話九段(33)二八五一・〇二九三・四五二三
振替　東京　一七三四〇一番



定価　300円

著者略歴

主な経歴

明治十年一月十三日　旧麹町区六番町四番地（現千代田区九番町一ノ三）に生まれた
明治三十六年七月　当時の帝大工科大学建築学科を卒業、直に大学院に入る
同　年十一月　横河民輔博士の横河工務所に勤務
大正二年六月　大蔵省技師となる
同　年七月　臨時議院建築局技師並に工営部調査課長兼工務課長となり昭和十二年七月営繕管財局を辞すまで、前後二十四年間、議事堂建築に従事した
大正十五年より昭和三年まで建築学会副会長を、昭和六年から八年まで会長を勤めた
昭和八年六月　工学博士を授与された
昭和十六年十二月　芸術院会員となる
昭和十八年五月　経済学博士を授与された
昭和二十七年一月　物故

主な業歴（大蔵省所管以外）

帝国劇場（基本設計）万世橋停車場　鐘ヶ淵紡績及神戸鐘ヶ淵小劇場　日本水力株式会社工場　有楽座
第一相互保険KK　内閣文庫　千葉県庁議事堂　山口県庁議事堂（共同設計）銀座ビル（松屋デパート）
東本願寺浅草別院　大阪帝大理学部

著書

江戸時代住宅建築概論　民家と住居　趣味の建築講話　鐔百姿　数寄屋建築　宿駅本陣の研究　建築二十講　古鐔図録　近世武家時代の建築　世界の議事堂　泥絵の大名屋敷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

目次

万年筆と自潤筆……七
町の思い出……一一
穴　藏……一五
名工巨匠と酒……二
地水火風空……二四
辰年に因む龍と建築……二六
甚五郎異説……二九
四方の喇嘛塔……三三
大正の震火と安政の地震火事……三六
焼失面積の大きさ……三七
防火と消防制度の有様……三八
防火家屋の奨励……四二
火除地と避難地……四四
大火とその延焼方向……四五
自守自衛の防火……四六
出羽大地震の記錄……四七
子供心になる九段の燈籠……五三
浜町河岸……五五
浅草の観音様……五八
俗説釣天井……六一
奇構と哀話の愛本橋……六六
技術は尊い……六八
塗家造り……七〇
軒と屋根……七四
雨　戸……七六
襖の表……八〇
竹礼讃……八四
南蛮錠……八七

逆柄の柄杓……九一
鐔……九五
眞鍮象嵌の鐔……九七
八橋透の鐔の意匠の体系……一〇六
謡曲を題材の趣味の透鐔……一一五
墨絵の馬の透鐔に就て……一一三
越前記内の歴代……一三四
明珍吉久の歴代……一四七
議事堂物語り……一五一
国産ブロンズ扉製作の苦心……一五一
人柱になりかけた話……一五三
衆議院御座所の由来……一五五
独逸人技師招聘とニコライ堂建築の由来……一五六
市来さんの思い出を聞く……一五七
面喰った中国の大理石……一五八
石垣を崩してまでも使った赤石……一五九
琉球から採った中央広間の石……一六〇
六つも七つも造って見た塔の頭……一六一
外国に取られて仕舞った折角の考案……一六二
議事堂に使った軽量煉瓦……一六三
震災後の記憶設計……一六三
夜の中空に浮出す高塔……一六四
梯子形鉄梁の由来……一六五
困らされた濠の石垣……一六六
蠟燭の灯で翌日の対策……一六六
石山めぐり……一六七
伊豆の石山……一六八
矢作川畔のみかげ石……一七一
徳山石と金華石……一七三
伊豆の砂岩石……一七五
朝鮮の大理石……一七七
越中富山の大理石……一七九
大笹小笹……一八〇

草水のみかげ石……一八一
現場の華……一八二
——広島仮議院物語り——
宮城を廻りて昔の姿を語る……一八五
主要街道の今昔……一九三
照明の思い出……二〇三
広重の江戸風景版画……二〇九
算法絵馬の話……二一二
匠家の秘伝書……二二一

図版

眞鍮象嵌の鐔……一〇一—一〇五
応仁象嵌・てっせん唐草象嵌・ぼたん唐草象嵌・水紅葉象嵌・雛野菊象嵌・尾長鳥象嵌・紋透唐草象嵌・文字透唐草象嵌
八橋透の鐔……一一〇—一二四
第一図—第九図
趣味の透鐔……一二七—一三一
鉢の木・籔・竹生嶋・三輪・桜川・海士・松風
墨絵の馬の透鐔……一三七—一三一
尾張・英国ホークショー蒐集・赤坂四代・忠重・其阿彌・江府住辰寿
越前記内の作品……一三五—一三八
龍丸彫透六角形鉄鐔・雙鶏丸彫透鉄鐔・楓に鹿丸彫透円形鉄鐔・梅丸彫透鉄鐔・南天丸彫透鉄鐔・隻鶴丸彫透鉄鐔・龍丸彫透円形鉄鐔
算法絵馬……二一四

万年筆と自潤筆

以前或る雑誌に江戸時代の万年筆ということを書いたら、余程興味を惹いたと見えて、台湾から態々書面を寄せられた人もあり、また直接に話をされた者もあった。それによると今日の万年筆という名のこともありまた昔万年筆と称したのもあったということで、更めて書いて見ることとした。

家にいても外に出ても万年筆は体から離すことの出来ぬものになってしまった。そして山間漁村のはて迄も行渡っている。鉛筆は持たなくとも万年筆だけは必ず持っているという風だから、ノートを小脇にインク壺とペン軸とをさげて教室に出入りしたことを考えると、此頃の学生は仕合せで万年筆の功徳は大したものだ。こうして万年筆は大道に莫蓙を敷いて無雑作に積み上げられて売られる様になったが、初めて輸入された当座は珍らしいもので外国帰りの人から見せられ

てうらやましくも思ったものだ。だが書生には一寸手にすることは出来なかった。

万年筆を最初に輸入したのは丸善だそうで、其の時何んと名づけて売り出そうかと色々と考えられ、万吉筆としようかという事になったが、余りにも露骨過ぎるというので遂に万年筆となったものだと、或る人がわざ〳〵私に知らせてくれた。

ところで今日の万年筆と比べると幼稚でもあり、また不自由だが江戸時代にも同じ作用をする自潤筆というものが発明されていたので、私はそれを江戸時代の万年筆だと言ったところが、台北大学の滝田氏から西鶴の「好色二代男」に「袖口より打雲の短冊のべて万年筆を染もあへず捨し身のと五文字書付る折ふし……」とあるから、其の物は自潤筆に似たものであろうが万年筆という名は貞享の比に見えていると教示された。勿論今日いう万年筆の名はこのこととは関係なしの新造語として命名されたのであろうが、全く偶然の一致ともいうべくして面白いことである。

西鶴のいう万年筆がどんな物であったか、全く判らない様であるが、兎に角今の様な便利な万年筆が無かった頃、これに相当するものは矢立と懐中硯位である。矢立は武家から町人まで行き渡り、従って其の形も装飾もさま〳〵であるが、兎に角墨壺と筆とが別々で余り大きくも無い墨壺の墨汁が乾いて無くなれば出先でも墨をすって入れなければならない面倒さがある。若しこの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

墨壺と筆とが一つになって絶えず筆先を潤していればこれ程便利なものはないとは誰しもが考えることであったろう。これに思い付いたのが発明家の鉄砲鍛冶である近江の国友兵衛一貫斎で、当時の新発明品として御懐中筆と名づけ作り出した。其の図と説明とを書いたものが先年江穂先戸科学展覧会に陳列されていたが実物はまだ見ない。しかし金属製の軸に墨汁を蓄え先端に筆の穂先を嵌めたもので其の作用からは万年筆と同じ着想である。

この一貫斎の懐中筆と殆んど変らないものが堺浦の芝達保教によって自潤筆と名づけて製作発売された。大体天保頃と推定されるが、墨汁を軸に蓄えて置く今日の万年筆とも見るべきものである。私の家に一本伝わっているが、三つの部分から成り軸は真鍮製の管で墨汁を入れ、綿で詰め先端には筆の穂先を嵌め、穂先を保護するキャップが先端に捻付で冠せられ、尾端にも捻付の蓋があり、それに孔があって紐で腰に下げる様になっている。この自潤筆の説明には

殿中或は旅行馬上又は写物聞書等記録の節墨を作におよばず管中より自潤出る水は寒気に不氷日数へてかはく事なし。

ふと書の節は筆を少し管中へ押込候得ば墨多く潤ふとく出来申候、細書の節は少し外へ出し候得ば墨潤すくなくほそく出来申候。

等と認められている。一貫斎のは懐中筆とされるばかりだが芝達のは自潤筆と名づけられて筆の働を現しているのが面白いと思う。ところが昔の万年筆の再現ともいうか自潤筆の変形とでも見るか、近頃軸を竹で作り固まらない墨汁を溜めて置く筆が京都で作られて名も自潤筆を襲いたいとの相談を受けた。

万年筆に就て折角各所から教えて貰ったのを共のまゝにして置くのは惜しくもあり、玆に再び書いて見た。（昭和十六年三月）

町の思い出

私の生立ったのは番町だが、其の頃の道幅は広いといっても四間にはならない。夜になると燈一つない暗い町で、墨塗の長屋門が竝んでいるかと思えば生垣の内には桑畑もあれば茶畠もあった。奥の方にある母屋は、茅葺屋根も沢山あった。その頃、ばあやと呼ぶ老人がいてそれと外へ出ると、こゝが何様の御屋敷あそこが何様の家だったと、自分の思い出を話して呉れるのだが、ふん〳〵と聞いているばかりだった。四谷見附から下六番町の角を左へ又右へ靖国神社の脇を九段へ行くのが、新宿から出て神田の青物市場へ時節ものを運ぶ百姓の通り道で、朝は夜の明けぬうちにいつも車や馬を連ねて通るのだった。だから生垣のある屋敷の一部に茅葺屋根の掛茶屋があって帰り途の馬子や曳子が縁台に渋茶を呑み煙草の輪を吹いているのが見られた。それが今ではコンクリートやアスベスト、セメント塀で囲まれているのだから、全くうその様な話である。

私の家には大枝下まで十間ほどの櫟の木がある。その上に登ると山の手に居ながら品川の海が見えるので葉の繁る夏場になると、友達とよく登ったものだが、近所にコンクリートの小学校が出来てみるとさまで高くはなくなって仕舞ったのだった。建物も町中の大木を高さでは制伏するものだ。

五つ六つの頃には日本橋の薬研堀に番町から別れて住んでいた。近所に、奥から赤い玉を棒の先に付けて店先でそれを引張って行くと細く延びて暫らくすると透きとおった棒になるものを作っていた。そばではその短く切ったのを糸で編んで小さい簾の様なものを作っていた。これが面白くて間がな隙がな見に行ったものだった。こんな硝子細工をする店は今時の市中では見られない。

ある時夜中に台所でコトン〳〵と音がし出した。母はてっきり泥棒と思って台所へ行ったのだった。台所では揚板が下から持ち上げられているではないか、恐ろしくもあり、気味悪くもあり、思い切って母は板を揚げて見たそうだ。ひょっこりと漬物の樽が顔をだしたのだ。床下一面の水に樽は浮き上ったのであった。父も共に飛び起きて子供達も皆な着物を着かえさせられたが、連日の豪雨に大川が氾濫して水は薬研堀の家のところまで犯して来たのだった。今行って見てもど

とが其の頃の場所であるか、さっぱり見当がつかない。

間もなく浜町河岸の毛利の屋敷内に住む様になった。そこには御殿といわれた留守番だけいた大きな構えがあって庭には築山も汐入の池もあった。其の時分には久松小学校へ通っていたので帰ると生垣の隙間をもぐって庭を我物顔に遊び廻ったものだった。川向に相撲のある頃には櫓太鼓の音は川に響いて聞えて来るし、夏になると大川を流す影芝居の音も聞えて来た。河岸の塀の内には土手があったので川開きの時には屋敷内の人々と共に茣蓙を敷いていながらに花火を見て面白がった。今の日本橋倶楽部の辺が丁度この屋敷かと思う。ある夏の日井戸水が出なくなった。その井戸は底付の井戸で竹樋で上水を引いてあったのだが大騒をしているのを見たら、樋に鯉がはまり込んで水が思う様に通らなくなったのだった。これなどは水道の蚯蚓よりは面白い話の種だ。

明治二十三年の頃は親父の勤めの都合で神田にいたので、錦華小学校へ通っていた。憲法発布の日に選ばれて万世橋の広場に出来た櫓の上から、鉄道馬車会社の人達の奉祝行列を見下しながら、紅白の餅を撒いた。それが済んでからまだ黒い塗家の低い家が並んでいた大通を日本橋へそして新橋へと歩いたのだった。日本橋は緑の葉で釣橋の様に飾られていたし京橋際は四角な緑門

で新橋は鳥居形の綠門だったと覺えているが、密柑・金柑・南天などで色どりして飾られていた。其の間の町々には幔幕と提灯で出來た飾が道のこちらからあちらへ跨がって出來ていた。其の頃の街路裝飾としては恐らく前代未聞だったのかも知れない。

親戚が砂村にあったので時々弟と二人づれで遊びに行った。子供の足のことだから牛が淵で休み常盤橋でまた休む、大川端では舟を見て行くという風だから、先づ一日がゝりだった。砂村の方は田畠ばかりだから夏には蟬を籠に入れて持って行ったが、下町の町中では蟬が珍らしいので蟬お呉れ〳〵と町の子供達は後について来る。帰りにはその籠に弁慶がにを入れて来ると山の手では蟹おくれ〳〵とついて来たものだ。だから今と違って自転車はなし自動車は無し交通は全く安全であった。同じ道を行く人は坊ちゃんどこへ行きますかと都合のよい所まで一しょに行って呉れた。人も親切だったのだ。(昭和十一年三月)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.